

妻

斎藤茂吉

青空文庫

妻はやはり Sexus Sequior と見立てなければつまりは満足は出

来まい。そういうことを考えずに済む亭主は、温良で小さく美しくて京人形のような妻を有^もっているものに相違ないとおもう。

女を甘やかす今の欧羅巴^{ヨーロッパ}の※Dame、社会状態は、全亜細亜^{アジア}

人からも、それから古代希臘^{ギリシヤ}、古代羅馬^{ローマ}の人々からも嘲^{ちやうしやう}笑

されるに極^きまっているといったシヨペンハウエルは、果してそういう京人形のような妻をば有^もっていないなかった。それであるからシヨペンハウエルは、若くして恋慕の息吹^{いぶき}をかけられなかったと同じ時に、年老いても罪深い女人どもの懺悔^{ざんげ}を聞いてやらねばならぬカトリック加特力の坊主の役をつとめなくとも好^よかつたのである。

そのシヨペンハウエルは、女というものは足の短い肩の狭い臀しりばかり大きいものだといった。これは欧羅巴の女を罵のしつた言葉なのである。

僕は西暦一九二四年の初秋から、鼻の低い足の短い妻を連れて欧羅巴の大都市を歩いていた。シヨペンハウエルが、満身の力をこめて罵倒ばとうした欧羅巴の女どもといえども、どうしても僕の妻よりも器量が好い。けれどもそれを逆にいえば、僕は黄顔細鼻の男に過ぎぬ。これを当年のシヨペンハウエルに較くらべるなら、所詮しよせん僕は不器量に相違ないゆえに、諦てい念ねんして二人は一しよに歩いていた。

フランス
イギリス
オランダ
ドイツ
スイス
仏蘭西から英吉利に渡り、英吉利から和蘭、独逸、瑞西とま

わって伊太利イタリーのミラノに来た。ミラノに来たのは僕は二度目である、そうして歩いているうちに妻はいつのまにか懐妊していた。僕はミラノでレオナルド・ダ・ヴィンチ一派の絵画をもう一遍見直そうとして、旅たびづかれ疲つかのしている妻を引張りまわしながら丸三日を過ごした。妻は美術館などに入っても、絵画などはどうでもいいというような顔付をして茫ぼう然ぜんとしていることが多かった。けれども僕はそんなことにはかまっていられないような気がして精を出して見て歩いた。

十月二日にミラノを立ってヴェネチアに向った。仏蘭西を出てからもはや二月ほどになった。汽車は急行で、東方へ向って驀まっし地に走っている。しばらくの間無言でいた妻は、その時何の前

置もなしに僕にむいた。そして二人はこういう会話をした。

「日本の梅干ねえ」

「何だ」

「おいしいわねえ」

会話はそのまま途切れてしまったけれども、僕はその時、今までに経験しなかった一つの感情を経験したのであった。夫婦なんぞというものは一生のうちに一度ぐらいいは誰でもこういう感情を経験するものかも知れぬ。あるいは運のいい夫婦はしじゅう経験しているのかも知れぬ。

僕はヴェネチアに四日いた。けれどもその時は梅干のことなどは忘れたように話さなかった。そしてヴェネチアでは唐とうがらし辛子

の酢漬を買って見たり、小蛸こだこのうでたのなどを買って食ったりしたのであった。

青空文庫情報

底本：「斎藤茂吉随筆集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

2003（平成15）年6月13日第7刷発行

底本の親本：「斎藤茂吉選集 第八卷～第十三卷」岩波書店

1981（昭和56）年～1982（昭和57）年

初出：「中央公論」

1926（大正15）年9月号

※底本巻末の相澤正己氏による注は省略しました。

入力：秋谷春恵

校正：高瀬竜一

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妻
斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>